

2020年5月31日(日)『地域アートはどこにある?』刊行打ち上げレポート

参加者 (50音順、敬称略)

金澤韻、北澤潤、小池一子、小林えみ、里村真理、高須咲恵、中川千恵子、Nadegata Instant Party (中崎透+山城大督+野田智子)、林暁甫、日比野克彦、藤浩志、藤田直哉、見留さやか、ミヤタユキ、山崎亮、鷺田めるろ

2020年3月31日に刊行された十和田市現代美術館(編)『地域アートはどこにある?』の刊行記念打ち上げは、コロナウィルス感染拡大防止のため、オンラインでの開催となった。招聘アーティスト、トーク登壇者、書籍編集担当者、美術館企画チームなど総勢18名が参加、海外在住の北澤氏(インドネシア)、金澤(上海)も参加できたというオンライン開催だからこそその利点も感じつつ、乾杯を経て、最初に、本への感想を一言ずつ頂いた。

\*

展示やトークを通してこのプロジェクトが扱ったトピックは数多くあったにも関わらずコンパクトにまとまっている、トーク6の星野×金澤対談では「地域アート」のこれまでの流れが見事に整理されている、特に、市民の座談会がアーティストらの活動と同じように収録されていることへの評価を複数の方から頂くなど、好評が続いた。小池一子前館長からは、当初、「地域」という言葉に違和感があったが、プロジェクトを通してコミュニケーションやコモンズという意味と重ねることができ、しっくり来たというコメント。中崎氏からは、藤田氏の『地域アート』刊行後もアーティストやキュレーターは批評を渴望しているが、この本はこの領域の議論のテーブルを広げてくれたと、今後への繋がりを期待する声もあがった。

企画チームのミヤタからは、プロジェクトへの思いと関わった多くの人へ感謝の言葉。「藤田氏の『地域アート』に抱いたモヤモヤを言葉にしたいと、金澤さんと2017年から企画を始め、長い時間かけて本の刊行まで辿り着いた。作家や、アートを職業とする人だけでなく、様々な人が関わり沢山の出来事が起きていることを伝えたかった。尊敬する作家や様々な立場の人が関わってくれたことにほんとうに感謝している」。見留は、「プロジェクトは勉強の毎日、企画チームで本当にたくさん話して制作し、編集では制作中の魅力的な出来事をどう伝えるか考え続けた。街の人にはこの時の記憶が鮮明に残っていて、今もこのプロジェクトの話をするし、その時の人との繋がりを日々感じている」。金澤は、難産だった書籍に関わった全ての人の苦勞をねぎらい、「必ずしも経済的に成り立つわけではないこういった活動に、全身全霊で取り組んでいる作家たちがいて、それを知ってもらいたかった。私も全身全霊で取り組んだ」と話した。編集の小林氏も、十和田の街の人と接した経験から、美術館がこの地に馴染み、積み重ねられた時を感じたと述べた。

映像の配信中、書籍に収録した市民座談会参加者からも「去年の今頃は、官庁街通りをベチャで“ちょい乗り”してましたね。ロストターミナルに十和田市民として参加できて楽しかった」とのコメントも。

その後、日比野氏の「人との関わりの部分が、コロナ状況下で必ず話題にされるが、実際に人との距離感が変わったとを感じる」という言葉を受けて、山城氏から全員に、今、何を考えているか問いかけた。藤氏は「ずっと何かと何かの中間の“接点”をどう作るかを考えてきた。コロナの前と今とでは軸は変わっていない」と言い、山崎氏は、中国の平民教育者・晏陽初の農

村改革運動に倣い、ワークショップをオンラインツールを使って開催するなかでツールの使い方を学んだ人が他の人へ使い方を伝えて、ワークショップ参加者全体のネットのリテラシーをあげていくという実践例を紹介。山城氏は「人と会わずにできるプロジェクトを考えたい」中崎氏は「一人で作っているのも楽しい。これからも人と会う、会わない時間のバランスを取っていきたい」。藤田氏は、「インターネットでの体験を補完するのが、アートプロジェクトのコミュニティを成立させる要因と思っていたので、実作者たちがやることは変わらない、と思っているのは面白い」と発言。また、鷺田氏は、ダンサーの砂連尾理氏から聞いた話として、ある大学で、オンライン授業になったことで出席できた学生の話や、みんなで集まるという状況から排除されていた人がいたこと、集まる/一人になるという対立で考えていては気づけないことがあると指摘。藤氏は「マーケットに取り込まれないチャンネルをアートに作りたくて、80年代に、アジアが欧米のマーケットに対する違う視点を持っていることを知り、ローカルから作った」と話した。高須氏は、「ロンドンの友達が東京で予定していた展覧会の作品制作ができなくなった。下絵や雰囲気伝えて描いてもらおう、と。おそらく上手くないけど、エラーもOKとして何かできないかと考えています」。林氏は、「親密さをどう作るか。自分は、中学から携帯があった世代だが、「遅いメディア」を考えたい、会うことの価値をもっと上げていけるはず」と力強く語った。編集の小林氏は「遅いメディアである書籍を作っているのだから、未来に向けての投瓶として作品を残すことにも興味がある。展覧会では過去の藤さんの作品が、今の自分にヒットする体験をした。アーティストと、これまでとこれからの時間軸を考えていきたい」。

北澤氏は、「本で星野さんが触れた、『現実も一つのフィクションだ』という言葉や『ウソから出た、まこと』が示唆することは大きいと感じる。僕たち作家は、作られたフィクションに対して、フィクションで返す。今生きている日常や社会がフィクションだからこそ、どう塗り替えるかという気持ちです」。

\*

コミュニケーションや移動のあり方が変化したコロナ状況下であっても、それ以前に自らのリアリティと向き合い、思考し、アクションしてきたことと大きく変わることがないと語るアーティスト、論者たちの声はとて力強く響く。この本には複数の論者のそれぞれの多様な立ち位置、多様な活動の軌跡が収められているが、それぞれがその延長に今を捉えようとしている。と同時に、世界中で、人間の体を持つ者が同じ状況を共有する困難な状況、また社会のフィクション性が如実に明るみに出されているこの時代を、変革のチャンスと受け止め、前向きに進んでいこうとするポジティブな態度もひしひしと伝わってきた。

この本は、現在、英訳し公開することをめざしている。その役を担う鷺田、中川両氏からは、「地域性のあるユニークな活動を英語圏の人に伝わるよう翻訳するのはなかなか大変。海外の研究者とのネットワーク作りなど、英語圏にどう伝えていくのか考えている。今日は一区切りですが、ひきつづき一緒に考えていきたい」と、この本がまた次のフェーズに入っていく期待を抱かせた。

(レポート・里村真理)